霊仙寺（りょうせんじ）・綣（へそ）遺跡発掘調査現地説明会資料

令和２（2020）年 12 月 20 日（日）

栗東市教育委員会・（公財）栗東市スポーツ協会

調査地　：栗東市北中小路１８１番１１他
調査主体：栗東市教育委員会
調査機関：（公財）栗東市スポーツ協会
調査原因：宅地造成
原因者　：オウミ住宅株式会社
調査面積：９，１１１㎡
調査期間：
（現地）令和２年６月 15 日～令和３年６月 18 日
（整理）令和２年６月 15 日～令和５年６月 16 日

今回の調査地は、霊仙寺遺跡の北東端部、綣遺跡の西端部に位置し、両遺跡にまたがった位置に所在します。栗東市域の中では琵琶湖に近い沖積平野に位置し、主として野洲川が形成した扇状地性低地に立地し、標高は約 93mです。

霊仙寺遺跡では、小平井地区で多量の瓦や無文銀銭などが出土し、正南北の地割が検出されるなど、白鳳寺院が確認され、小平井廃寺と仮称されています。

綣遺跡では、弥生時代後期の方形周溝墓群が検出され、前方後方形周溝墓も確認されています。また中世では、環濠集落の大規模な濠が確認されています。

周辺の遺跡では調査地西方の十里遺跡で、弥生後期の集落から後漢鏡の破鏡や銅釧が出土したほか、小平井廃寺に近い地点で、飛鳥時代の区画溝から多量の土器、律令祭具とともに天武朝の木簡が出土していて、評衙関連遺跡との指摘がなされています。調査地北方の守山市下長遺跡で弥生時代後期末から古墳時代前期の拠点的集落があり、首長居館や祭殿が確認され、銅鐸飾耳や準構造船などの豊富な遺物が出土しています。

木簡
（十里遺跡・飛鳥時代）

軒丸瓦（「小平井廃寺」・飛鳥時代）

今回の調査成果

これまでに調査面積 9,000 ㎡のうち約 7,000 ㎡を調査し、弥生時代後期から鎌倉時代までの様々な遺構遺物が出土ました。調査は継続中ですが、現時点での調査成果の概要を公開します。

弥生時代では後期の竪穴建物 1 棟（一辺約 8m）の他、複数の円形土坑、井戸 1 基を検出しました。続く古墳時代、飛鳥時代では、出土遺物は見られますが、遺構は今のところ検出されていません。

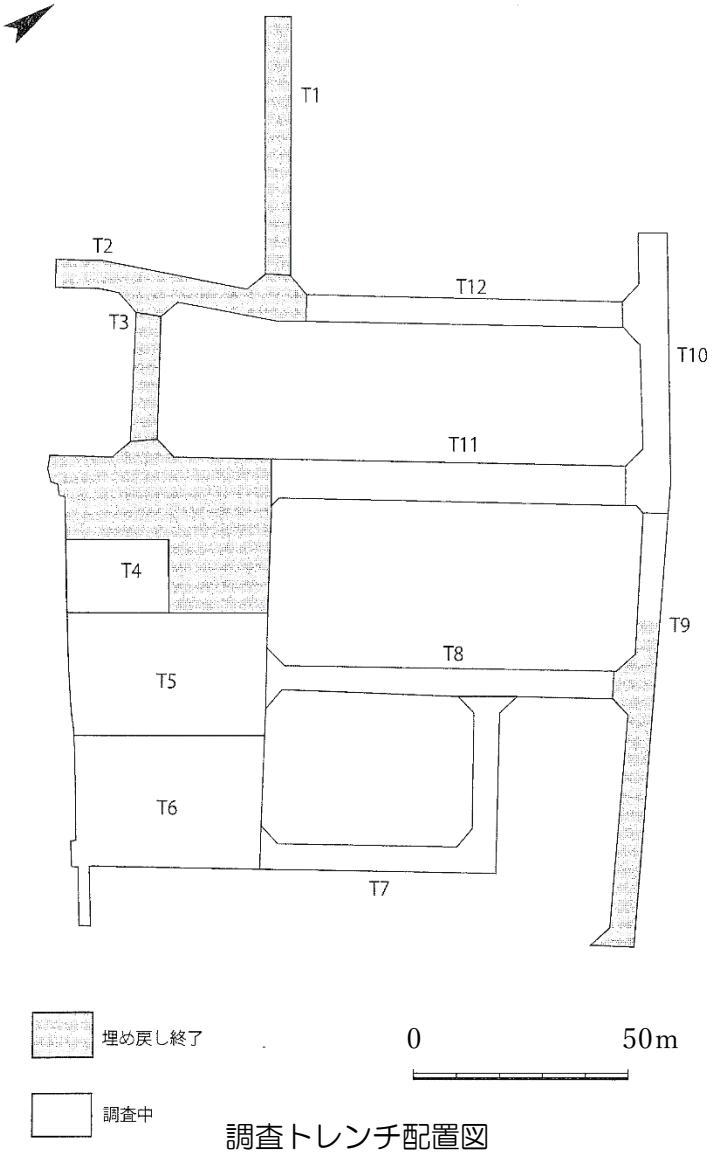
奈良時代では、２棟の掘立柱建物と井戸１基を検出しました。井戸 SE877 は、トレンチ 6 の東端で検出しました。直径 2.6m、深さ 1.55m、井戸枠などは残存しませんが、墨書土器が３点出土しました。いずれも須恵器杯身の底部に墨書が残り、２点は「廣津」（ヒロキツ）と判読でき、１点の文字は不明です。

平安時代では、９～10 世紀代と考えられる掘立柱建物６棟と井戸１基を検出。掘立柱建物のうち２棟は高床倉庫で、うち 1 棟は３間×３間、床面積 25 ㎡の比較的大規模な造りです。井戸は一辺 1.6m、深さ 1.6mで、井戸底には方形に組まれた井戸枠とその内部に曲物（まげもの）が残存し。曲物内部から黒色土器椀のほか、水霊祭祀の祭具である斎串（いぐし）が 4 点出土しました。

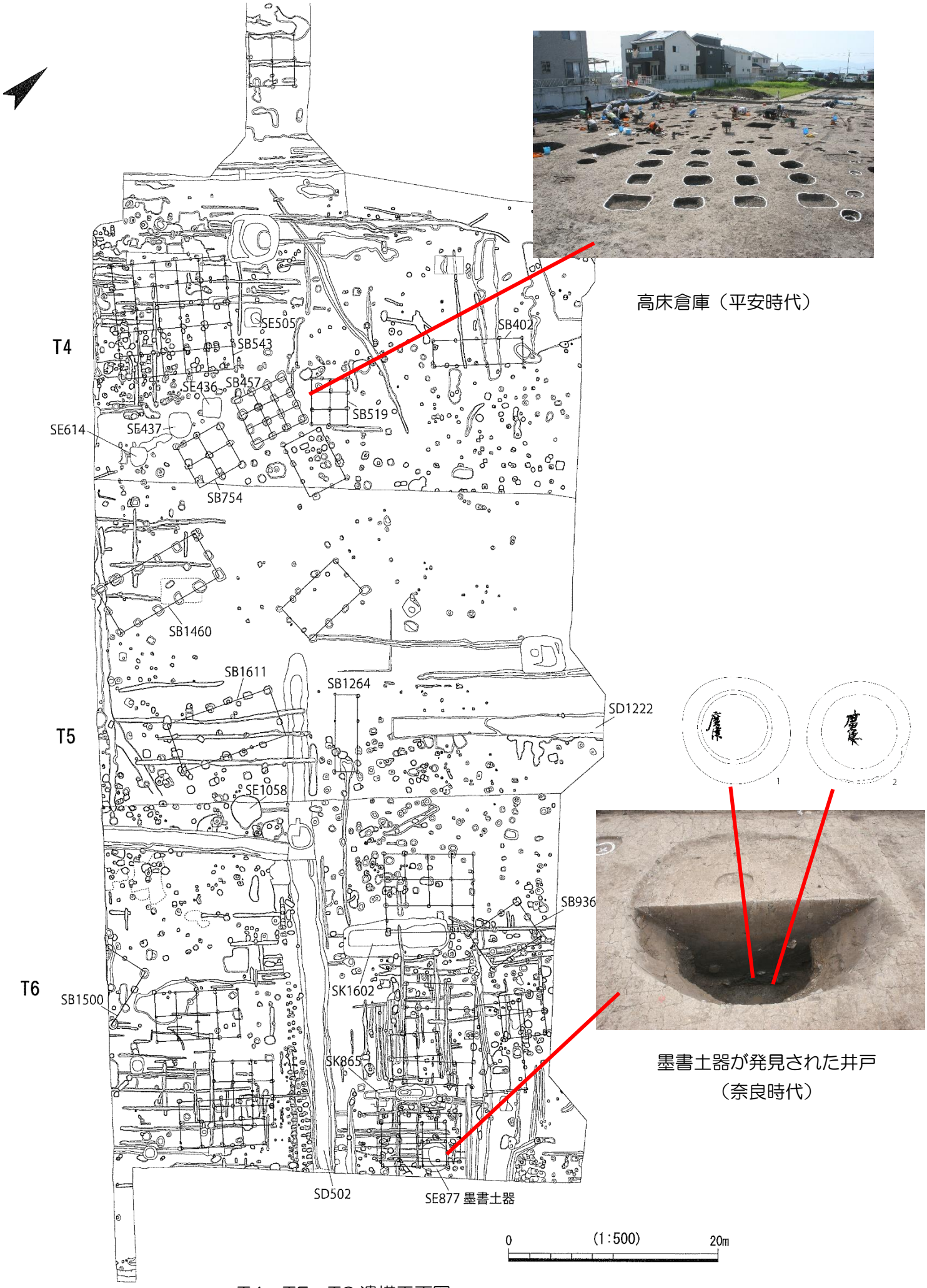
平安時代末から鎌倉時代初めの 12 世紀後半から 13 世紀前半では、掘立柱建物 14 棟以上、井戸 10 基、土坑、区画溝を検出。掘立柱建物は１間×３間、２間×３間、２間×４間、３間×４間など小・中規模のものですが、５間×５間で、一辺 10.8m、床面積 120 ㎡の比較的大規模な建物があります。区画溝は３条確認。規模は幅 2.2m～2.8m、深さ 0.6m。最長 50mにわたり検出しました。また、11 世紀以前の水田を検出し、畦畔周辺の 15m×８m（120 ㎡）の範囲から足跡状の窪みを多数（約 400 ヶ所）検出しました。

竪穴建物（弥生時代）

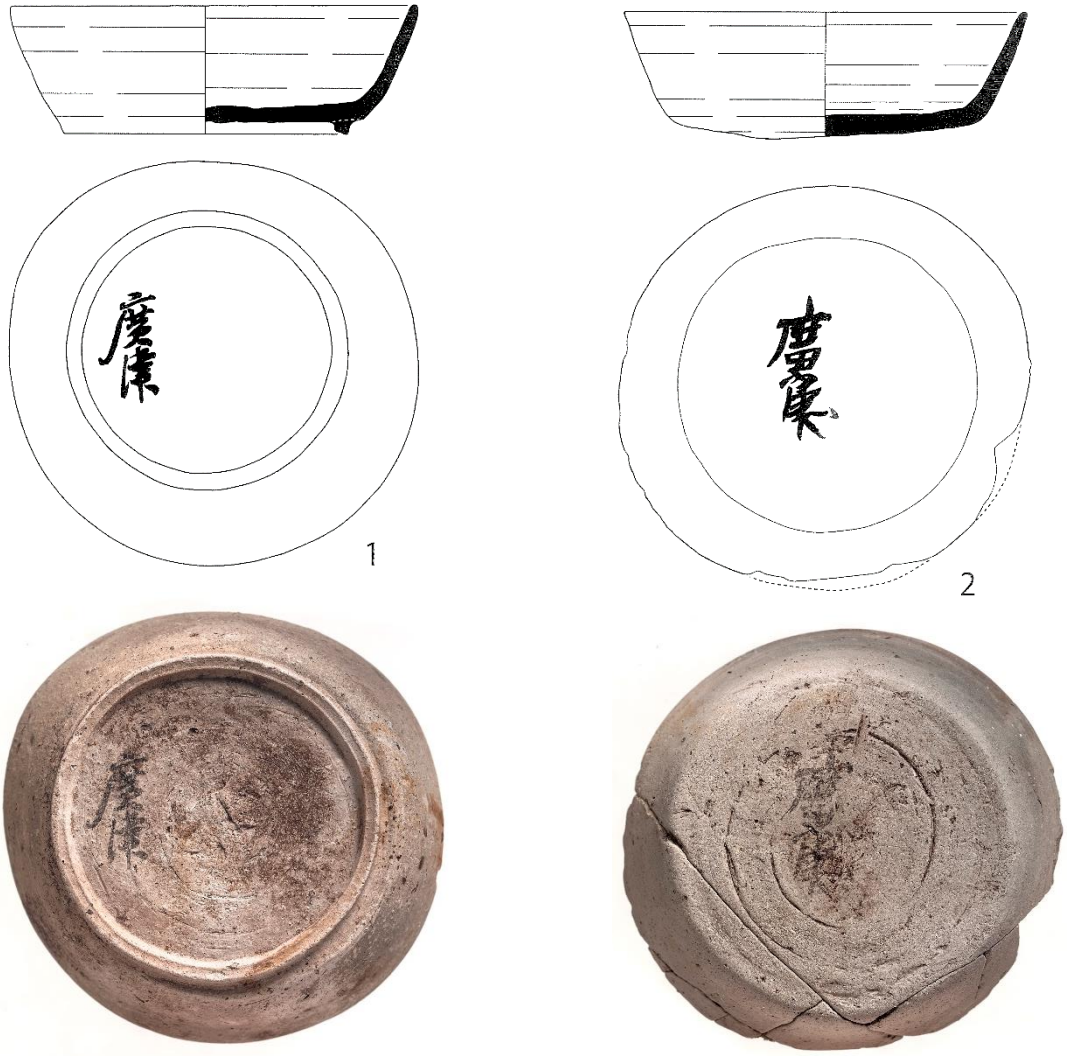
井戸（平安時代）



調査トレンチ配置図



T4・T5・T6 遺構平面図



まとめ

① 弥生時代後期では竪穴建物が１棟の検出であるが、土坑や井戸からは比較的多量の弥生土器が出土していて、周辺に集落の広がりが想定されます。なお、竪穴建物は、壁溝（へきこう）・屋内土坑（どこう）・主柱穴のみの検出であり、弥生時代の生活面が数十センチにわたり削平されていることが分かります。

② 奈良時代では、正南北方位を採る２棟の掘立柱建物と井戸１基を検出しました。井戸 SE877 からは墨書土器「廣津」（ヒロキツ）２点が出土。「廣津」氏は物部系の渡来氏族であり、近江国栗太郡物部（もののべ）郷にあたる当地に居住した氏族を考えるうえで貴重な資料になりました。

③ 平安時代の掘立柱建物６棟と井戸１基を検出。井戸には木枠と曲物が残り、曲物内からは水霊祭祀などに用いられる祭具である斎串４点が出土しました。

④ 平安時代末から鎌倉時代始めには、区画溝に囲まれた集落が発達し、掘立柱建物を建替えながら生活を営んでいた様子がうかがえます。14 世紀には北中小路の現集落や、東山道沿いへ集落は移り、この付近が水田化していったことが、耕作痕の存在からうかがえます。

⑤ 区画溝をもつ集落の北側では、11 世紀以前に水田が営まれていましたが 12 世紀後半には居住地となっています。

以上、広範囲の調査により、この地域の歴史的様相の一部が明らかになった意義は大きいといえます。